昭和三十三年度 眞宗同學會大會研究發表要旨

三願轉入に就て

廣瀬 杲

三願轉入の文に就ては從來から之を宗祖に於ける入信の歴程を物語るものであると見て、それが宗祖の生涯の何時に當るものであろうかと云う如き考究が盛んに行われた。然しこうした立場に於て三願轉入の文を理解しようとする處から、それが後序の「建仁辛酉暦棄二雜行一兮歸二本願一」の文と撞着するかの如く考えられ、そのため種々の會通も行われた。

然し三願轉入の文は決して單なる入信過程若くは信仰生活に於ける回顧の記錄に止まるものではなく、そこに眞宗教學の依つて立つべき根源の世界が開示されているのである。宗祖は後序に於て自記された如く、法然の選擇本願念佛の教に遇うて雜行を捨て、本願念佛に歸した。ここに宗祖の生涯に於けるただ一回の廻心がある。こうした捨雜歸正と云うことは人間にとり空前絶後の出來事であり、それは人間が變革されることであろう。ここに教を聞く處に成り立つ聞信一念の場がある。卽ち就人立信である。三願轉入とはその稀有なる聞信の一念成就の現實を內觀自省する處に見開らかれた信の內景を語るものである。信卷別序には「夫以獲二得信樂一發二起自二如來選擇願心一」と說かれている。然し信が願より生ずると云うことをば、具體的に如何にして自證することが出來るであろうか。その自證の相を語るものが三願轉入である。卽ち信が願より生ずると云うことは、聞信の一念の內觀によりその根源に久遠來働き給う大悲招喚の本願に遇う處に證知されることである。我々は一般的には本願があつてそれが信一念として成就すると考えるが、それは道理としてのみ云われることであつて、具體的な信の現實としては一念の信の成就に立つ處に、それの內觀を通して本願に遇うのである。一念の信を內觀せしむるものはその信自體が新しく見出した人生の現實相であろう。それ故信が願より生ずると云うことは、具體的には願が信により證知せられることの外にはない。この一念の信の內深くにありて大悲招喚の本願に遇い、そこにその本願の御もようし（廻向）により今日（難遇今得）遇）あらしめられた自らの無始以來の機相を深信せしめられ、益々信は願より生ずると云う他力廻向性を領受する。これが三願轉入の內景である。それ故三願轉入は一面に本願攝取の樣相として十八願から廿願十九願への轉出が示され、同時に一面にはその願海中に「かねてしろしめ」されてあつた「煩惱具足の凡夫」たる「親鸞一人」の機相として十九願廿願十八願の機の轉入が語られているのである。眞宗教學の大地をなす本願力廻向の教義の具體的な意義も、こうした三願轉入の領解を通さずしては明らかとならぬのではないであろうか。

淨土義の立場から見た維摩經について

橋本 芳契

維摩經は初期大乘經の隨一として、その成立はもとより龍樹以前に屬し、龍樹の教學も法華等の諸經と共に特に此經からは其空思想に影響されたと考えられる。而して斯經の主題は、初章佛國品（奘譯、序品）に示された如く、寶積長者子が「佛國土の淸淨を得る」（奘譯、嚴淨佛土）に就て、「諸菩薩淨土の行」（謙譯、如來佛國淸淨の行。奘譯、淨佛土の相及び菩薩の淨佛土を修する）を問うたに對し、佛が「衆生の類」（謙譯、岐行喘息人物の土。奘譯、諸有情土）が其であると答え給うた淨土問題にあるとしてよい。其に就て經は更に、維摩詰（奘譯、無垢稱）なる長者を登場させ、彼をして舍利弗等の聲聞弟子及び彌勒等の菩薩が佛道に關しなお有限相對な見に留まれるを批判し、軈て又登場する文殊との協力に於て無限絶對な不可思議解脫（安井講師維摩經試解にはこれ彌陀の妙果、無上涅槃なりとす）の實義と眞相を開示させた上、遂に舍利弗の問を緣として佛自ら維摩詰の本國は阿閦（無動）如來の妙喜（謙譯、妙樂）世界なることを明かさせ、其他菩薩道の實際を種々に說いた。其間、維摩詰が食を乞うた上方衆香（奘譯、一切妙香）世界の香積（奘譯、最上香臺）佛は、其國菩薩の疑問に答えて「維摩詰は諸菩薩の爲說法し、化を遺して我名を稱揚し並に此土を讚し、娑婆菩薩をして功德增益せしむる」と宣う。其前後に、①娑婆と衆香は上下四十二恒河沙の距離にあり、娑婆主釋迦牟尼佛が今現に五濁惡世に在て小法を樂う衆生の爲道教を敷演し（什譯文）、②維摩詰が殊勝の大功德を成就し、一刹那にして無量無邊の菩薩を化作して十方一切國土に遍く遣し、佛事を施作して無量有情を利益安樂せしむ（奘譯文）等の經句あり、說相頗る阿彌陀經に類同又は近似したものあるを覺えさす。之等は次下に、衆香の香飯食者が身安快樂なること一切樂莊嚴（謙譯、一切安養。奘譯、一切安樂莊嚴）の諸菩薩の如しとて、極樂世界の名を出だすことと相俟ち斯經の大乘經中での位置を推知さす。煩惱卽菩提、淤泥の華等の經句は世親以下淨土歷祖の深く關心する所であつた。蓋し維摩詰は佛果を得ると共に娑婆に願生し有緣を度して暫くも休息することなき「已登正覺」（太子維摩疏）の大士者で、在家止住を本位とする眞宗教徒には活師範たり。曇鸞は維摩家とも稱すべき僧肇に深く依り、善導にも維摩讃がある程だが、宗祖は更に二諦相依の行實に維摩道を證成された。信心正因の宗義には、魔界外道をも攝受して無碍自在なるが佛道とする維摩經の底意に契當するものあり、衆香國の香飯得脫と娑婆世界の言語苦難の逆說には劫つて稱名道への接近あるかに見える。一層に經の眞意を搜り、不可思議解脫 acintya-vimokṣa の妙唱には、宗祖が佛智不可思議とされた彌陀誓願の本義を考究實證していくことも學徒の任務であろう。殊に禪經としての開發を受ける以前既に維摩經の淨土義が深く注意されていた史實を重んじ、更に藏譯の現存する便利にも併せて斯經の淨土系諸經論との交涉が愈々明白にされ、眞宗學がより普遍的な教理思想の基礎の上に發展することが望まれる。經說として極端な逆理をも內藏するが、淨土義の立場からは機の深信の趣意にあるものである。